



ディケンズの『クリスマス・キャロル』を読む

その他のタイトル	A Practical Report : The Reading of A Christmas Carol
著者	宇佐見 太市
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	22
ページ	15-33
発行年	2020-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/00020114

ディケンズの『クリスマス・キャロル』を読む

A Practical Report: The Reading of *A Christmas Carol*

宇佐見 太 市
Taichi Usami

This article is not a scholarly paper but a practical report of a literary classwork of the Faculty of Foreign Language Studies in Kansai University. In the classroom work, the author of this article takes up *A Christmas Carol* written by Charles Dickens (1812-70), a British novelist. The reading of *A Christmas Carol* in the class needs to be approached from the linguistic and literary standpoints to the reading comprehension. The reason why the author adopts classic works like Dickens' *A Christmas Carol* is because the classic literature seems to contain universal truth beyond time and space. The author of this report entertains the belief that the students' literary achievements can be the wisdom for living after their graduating from Kansai University. Translating English into Japanese and also learning the history, culture, thought, and customs of the 19th century Victorian period will surely help the students to be healthy and strong in any environment they may find themselves in after their finishing at Kansai University. Being confident that this type of research should be highly prized, the author of this article will promote the love of literary learning in the class.

キーワード

Charles Dickens, *A Christmas Carol*, the English original, translation, the Japanese language, the significance of English literary studies in present-day Japan, the Victorian age, English-language teaching

序

英語教育の実践的応用篇として英米文学を捉えている筆者は、英米文学系の授業において、「ランゲージ・アーツ」と「リベラル・アーツ」の双方に注視するように努めている。外国語学部の「専門演習ならびに卒業演習1・卒業演習2」の授業（三年生の秋学期から卒業するまでの一年半にわたって同一教員が同一学生を連続して担当する運営形態の授業で、筆者の講義概要のタイトルは、「楽しめる英文学—たとえばディケンズ文学の今日的意義を探ってみよう！」）

である)がまさにその一例であり、筆者がそこで使用する教材としては、受講生の精神的成熟度の尺度となりうると信じてやまない、幾分高度な「英米を主とした文学作品」を用いることが多く、とりわけ古典と呼ばれるものを積極的に取り上げることにしている。なぜなら、時の試練をくぐり抜け、生き延びてきた古典には、無限の深奥を湛えた豊饒な生命力が備わっており、受講生の魂の啓培にふさわしいと、筆者は考えるからである。

ただでさえ時空を超えて作家と読者が大きくかけ離れている英米文学の古典の場合、日本の読者は、外国語と母語が行き交う異次元の文学的虚構の世界に自らの実存を注入せねばならない。情報処理としての英文解釈・読解という作業は、多面的かつ重層的であり、一筋縄では行かない知的営為だが、究極的には読者がテキストをひたすら丹念に読むという意識的行為に尽きるのではないと思われる。作家が全力を尽くして表現したものを読者も同じく全身全霊をささげて読み解く気概があって初めて、テキストは重い口を開くに違いない。このように、外国語である英語の手触りを感知しながらテキストの深遠に迫り、テキストを剔抉するのが読者の役割だと、筆者は思料する。筆者は、仮想現実の装置としての「文学」の実践的効果・効能を常に念頭に置き、「英文学と英語教育学」の融和によって生起する「学知」を受講生に伝授したいという願望を抱きつつ、ゼミを担当している。

閉塞感漂う現代日本社会の若者に私たち大学人はどう手を差し伸べればよいのか？ひとつ間違えば心の枯渇によって自滅の道を辿ってゆかざるをえない若者にとっての癒しと復活の道標は何か？このようなことを絶えず自問自答しながら、英文学と英語教育学との融合・統合によって生じる「知見」が学生にとっての「生きる自信の源」になればと、秘かに願う筆者である (Cf. 宇佐見太市『実践知性としての英文学研究』関西大学出版部、2014)。

実際、2019年度の春学期に学会当局から執筆を依頼された日本ブロンテ協会発行の*Newsletter*の「巻頭言」に筆者は、「現代日本とブロンテ学」と題するエッセイを載せたが、それは上述どおりの筆者のいつもの英文学研究上の確たる信念・信条を素直に綴ったものである。以下に、活字となった巻頭言の最終のパラグラフをここにそのまま引用することをお許し願いたい。

「理不尽で不条理な逆境・苦悩・懊悩に苛まれている現代日本社会の人たちにとって、懐が広く気宇壮大なブロンテ学が果たす役割は非常に重要だと思う。日本のブロンテ学研究成果が、悩みを抱えながらも閉塞した時代を生きていかざるをえない老若男女に、レジリエンス・慰藉・歓喜・幸福などを届けてくれるにちがいない、と私は信じてやまない。」
(*Brontë Newsletter of Japan*, 第99号、2019年11月1日発行、日本ブロンテ協会、p.1)

本稿においては、上述のブロンテ姉妹の文学ではなく、英国ヴィクトリア朝時代を代表する国民的作家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の人口に膾炙している作品『クリスマス・キャロル』(*A Christmas Carol*, 1843) を取り上げ、教室での授業 (前述の一年

半連続の「専門演習・卒業演習1・卒業演習2」の一端をここに再現したいと思う（ただし筆者は、2012年度秋学期と2013年度春学期は連続してサバティカル・イヤーとしての国内研修期間であったので、本学部の一期生と二期生に対してはこの授業は担当しておらず、2011年4月入学の本学部三期生から今に至るまでこのゼミを担当している。ゼミでは毎年度、この『クリスマス・キャロル』を精読しているが、必ずしも同じ授業運営形態ではないということをあらかじめ断っておきたい）。

この『クリスマス・キャロル』は、山本史郎・東京大学名誉教授の言葉を敢えて借りれば、「ほとんど日本文化の一部のようになってしまったもの」（山本史郎『名作英文学を読み直す』講談社、2011、p.4）に相当し、現に、日本における最初の『クリスマス・キャロル』の翻訳である『影法師』（竹の舎主人（＝饗庭篁村）訳、1888年9月7日から同年10月6日まで22回の連載、読売新聞）が出版された明治から令和の現在に至るまで、あまたの翻訳書が公刊されている（Cf. 宇佐見太市『ディケンズと「クリスマス・ブックス」』関西大学出版部、2000）。そして翻訳書以外にも私たちの周りには身近な例として、『クリスマス・キャロル』の演劇・映画等がふんだんにあり、たとえばグローブ文芸朗読会が年の暮れの12月に東京を中心にして開催する『クリスマス・キャロル』の朗読会には筆者はこれまで何度か足を運んでいる。これは日本語による朗読会だが、原作と比べて遜色が無い。むしろ現代日本の精神的ならびに文化的風土にすっかりなじんでいる感すらある。また、市村正親主演の「ミュージカル・スクルージ～『クリスマス・キャロル』～」は、1994年の「スクルージ」（レスリー・ブリキウス脚本・音楽・作詞、三田地里穂訳、岩谷時子訳詩、吉岩正晴演出、東京公演）の初演以来、途切れてはいるが、好評で今なおミュージカルとして上演が続いている。さらに映画においては、「*Merry Christmas! ロンドンに奇跡を起こした男*」と題するアメリカ映画が2018年11月末日に日本で封切られた。これは、作者ディケンズの『クリスマス・キャロル』の創作過程を描いた映画で、日本語の吹き替え版において市村正親は、ここでもお得意のスクルージ役の声を担当している。

ところで翻訳書に関して筆者が教室で面白い現象だなと毎年感じるのは、ゼミ生のほとんどが、数ある邦訳のうち、なぜか村岡花子の新潮文庫の翻訳本（初出は、『クリスマス・キャロル』新潮社1952。その後、村岡花子訳は1966年に『クリスマス・キャロル』と題して河出書房の『少年少女世界の文学』8にも収録される）を選んでいるということである。村岡花子の手になる翻訳書『クリスマス・キャロル』は、一般的な翻訳書の枠を超え、もはやディケンズの原作から自立した確固たる村岡花子独自の日本文学の傑作と言ってもおかしくないと思ふゆえ、それを敢えて選んだ学生たちの真意を慮るたびに、筆者は、上記の山本史郎の言説に思いを致してしまうことを付言しておきたい。

1 作品『クリスマス・キャロル』

1.1 チャールズ・ディケンズの執筆に纏わる動機・背景についての概要

1843年10月、ディケンズは、マンチェスター芸術振興会主催の募金活動のための講演のあと、産業化・工業化の時代に生きる人々の悲哀を題材にしたものを描くべく、執筆に勤しむ。同年11月、挿絵画家ジョン・リーチ (John Leech) と手を組む。12月17日、最終章が印刷に回され、二日後には書店に並ぶ。クリスマスイブの12月24日、初版の6000部が完売となる。翌1844年1月、増刷され、さらにはニューヨークの出版社からも出る。2月にはロンドンで舞台にもかけられるようになる。1853年末には、作者自ら、慈善活動の一環としてバーミンガムでこの作品の公開朗読会を実施する。その後、現在に至るまで、彼のこの作品は何度も映画や演劇となって世界中の人々を魅了してきた (Cf. パンフレット「*Merry Christmas! ロンドンに奇跡を起こした男*」東急レクリエーション発行、2018年11月30日。受講生には筆者が映画館にて購入したこのパンフレットのコピーを配布するが、同時に、Page, Norman, *A Dickens Chronology*, Macmillan Press, 1988. の該当箇所をも提示し、よりいっそう詳細な解説を加える)。

以上がディケンズの執筆に纏わる動機・背景についての概要だが、その動機に関して筆者は、「経済的な苦境を脱するために筆を執ったディケンズ」と、拙書『ディケンズと「クリスマス・ブックス」』関西大学出版部、2000) で述べているが、上記の映画「*Merry Christmas! ロンドンに奇跡を起こした男*」は、特にその点を強調した作品であり、現にその映画のパンフレットにおいても、「落ち目となったベストセラー作家のチャールズ・ディケンズは、これから子どもが増えるというのに、家の改装費用にも事欠くありさまだった」と記している。事実まさにこの通りだが、筆者としては授業で、これを機に、ディケンズの生涯の略歴を追跡することにしている。このとき受講生には、Forster, John, *The Life of Charles Dickens* 3 vols. (Chapman & Hall, 1872-74) が学術的資料としては最適であることを教示する。

1.2 ディケンズの英語に関する特徴

筆者手持ちの市河三喜『英文法研究 (増訂新版)』(研究社、1972: 初版は1954) の「第二編 ディケンズと俗語の研究」を拠り所として、ディケンズの英語についての知見を学生に披瀝する。ディケンズは、'phonetic spelling' や 'コックニー' を多用し、類ない豊富な語彙力を駆使して不滅の名作を生み出したことを教授する。このことをひしひしと実感しうる後期の名作『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1861) の第一章を引き合いに出し、たとえば 'pint' は 'point' のことだと教える。さらに、ディケンズの文体は雅俗混淆であるがゆえに、これは私たち外国人にとって魅力でもあり、同時に難解でもあることを指摘する。

ところで、このたび本稿で用いる『クリスマス・キャロル』のテキストは、私たち専門家がふだん用いる定本の *The Oxford Illustrated Dickens* の *Christmas Books* ではなく、あくまで

教室で実際に使用した大学用の教科書 *A Christmas Carol*（北川悌二編注、北星堂、1973）ではあるが、実はこれは上記の定本（原書）と同一であることを断っておきたい。そして本稿では、‘STAVE I *Marley's Ghost*’の章を取り上げるが、ここに記したのは、必ずしも授業で触れたすべてのものではなく、その一部分に過ぎない。筆者は、テキスト講読の際、作品を味わい尽くして読み進むウラジミール・ナボコフの掣に倣って授業を進めているが（Cf. Bowers, Fredson, (ed.) *Vladimir Nabokov: Lectures on Literature*, Harcourt Brace Jovanovich, 1980）、時間的制約で精読が無理なときもある。

本稿執筆においては、北川悌二の注釈と重複しないように留意した。また、テキスト読解の授業に先立って、‘Carol’の意味の説明と、それに伴って欧米の「クリスマス」に関する歴史的概要を施すことは申すまでもない。その際、通常の百科事典に載っているような英米文化に関する一般的知識だけではなく、いくぶん高尚にはなるが、クロード・レヴィ＝ストロース／中沢新一『サンタクロースの秘密』（せりか書房、1995. クロード・レヴィ＝ストロースの「火あぶりにされたサンタクロース」は中沢新一訳で、「幸福の贈与」は中沢新一著）をも学生に紹介する。

1.3 テキスト読解の具体例

1) Old Marley was as dead as a door-nail. (p.1)

この箇所は私たち教員にはあまりにも有名だが、学生にとっては未見ゆえ、丁寧に教授する。「マーリー爺さんはドアくぎと同じほど死んでいた」と、ひとまず直訳したのち、door-nailは、昔、飾りのためにドアに打った「飾り釘、びょう釘、ドア釘」であり、何度もたたかれるから‘dead’のイメージが強いと教える。そして、ディケンズの場合は、このように、一般的にmetaphor（隠喩・暗喩）よりもむしろsimile（直喩）が多用されることを言い添える。

2) And even Scrooge was not so dreadfully cut up by the sad event, but that he was an excellent man of business on the very day of the funeral, and solemnised it with an undoubted bargain. (pp. 1-2)

この‘but’の用法は、否定構文に続いて従属節を導く用法で、‘but (that) = that...not’であることを確認し、次に‘He is not so foolish but (that) he can tell that.’の英文（「彼は、それがわからぬほど愚かではない＝彼はそれほど愚かではないので、それがわかっている」）を例に出し、この箇所の意味を把握させる。英文の前から訳していけば、「彼は、その悲しい出来事に大して心を痛めなかったので、葬儀の当日にも、みごとなまでに実業家としての手腕を発揮し、確実

に利益のあがる葬式を厳粛に営んだ」となることをゼミ生に納得させる。また、‘solemnise’ に関しては、綴り字が ‘solemnize’ でないのはイギリス英語の特徴であることを認識させる。他に、‘realise’ や ‘recognise’ などをも例に挙げる。

3) If we were not perfectly convinced that Hamlet’s Father died before the play began, there would be nothing more remarkable in his taking a stroll at night, in an easterly wind, upon his own ramparts, than there would be in any other middle-aged gentleman rashly turning out after dark in a breezy spot — say Saint Paul’s Churchyard for instance — literally to astonish his son’s weak mind. (p.2)

下線部は、俗に「鯨の構文」ということで、かつて日本の大学受験生には必須であった ‘A whale is no more a fish than a horse is.’ (「鯨が魚でないのは、馬が魚でないのと同じだ。」鯨は決して魚ではないという意味を強調している文) という英文を私たちに想起させ、than 以下に関して、there would be (anything remarkable) in any other... の如く、省略されている箇所を指摘する。その後、「ハムレットが、東風と共に、夜、城壁の上をさまようことはちっとも不思議ではなく、それはちょうど、誰か他の中年紳士が、文字通り意気地なしの息子を驚かせるために、たとえばセント・ポール大聖堂の墓地といった吹きさらしの場所に、暗くなってからむこうみずに外出することと変わらないだろう」と和訳する。あとはいろんな邦訳を提示し、最終的にはゼミ生の解釈に委ねる。

4) Oh! but he was a tight-fisted hand at the grindstone. (p.2)

‘tight-fisted’ は「きつく握った、強く握った」という意味から、今では辞書に「けちな」と登録されている。‘hand’ は「人」の意味であり、‘grindstone’ は「回転といし、ひきうす」の意味だが、‘at the grindstone’ という前置詞句・副詞句が熟語化して辞書にも登録されており、「極度に」の意味が記されていることを指摘する。筆者は、「彼は、ひきうすをつかんだら放さないような、それほどけちな人だった」とひとまず訳し、「彼は、といしで刃物を磨くとき、固く握って放さないように、お金を決して握って放さない、そんな極度にけちな人だった」と、言い換える。

5) The cold within him froze his old features, nipped his pointed nose, shrivelled his cheek, stiffened his gait; made his eyes red, his thin lips blue; and spoke out shrewdly in his grating voice. (p.2)

まず 'lips' については、英語の場合は、日本語とは違って、唇の赤いところだけでなく、口の周囲のかなりの部分をも指す言葉であることを教授する。たとえば、'upper lip' は、日本語の「鼻の下」に当たる部分であることを確認する。次に、'spoke out' は、主語が 'the cold within him' で、擬人法ゆえ、ひとまず筆者は、「彼の体内の冷たさは、人をいらいらさせるような彼の声で、激しく己を主張した」と直訳をしたあと、「彼の体内の冷たさは、人をいらいらさせるような彼の声の中にはっきりと表れていた」と意識する。ところで、この 'shrewdly' は、'harshly' の意味であることを教える。

6) The fog came pouring in at every chink and keyhole, and was so dense without, that although the court was of the narrowest, the houses opposite were mere phantoms. (p. 4)

この箇所 の 'of the narrowest' は、「絶対最上級 = 独立最上級」(具体的に他のものと比較するのではなくて、'very narrow' 程度の、意味の弱まった最上級) であることを指摘し、例文として、'At all times her dress was of the poorest. (いつも彼女の衣服は、ごく粗末なものであった) を挙げる。また、'phantom' については、同義語として、'ghost'、'spectre'、'vision'、'apparition' などがあると教える。

7) 'I wonder you don't go into Parliament.' (p. 7)

'go into Parliament' は、「下院議員になる」の意味。ここで、英国の現行の「国王・上院・下院」の三部構成について説明をする。1911年の議会法で、下院優先の原則が確立したことも教示する。両院を通過した法案は、国王の裁可または上院委員会の承認を経て法律となる。国王は拒否権を持つが、1707年以来、拒否権は行使されていない。

8) 'Don't be angry, uncle. Come! Dine with us to-morrow.' (p. 7)

'to-morrow' は、元々は 'to-morgen' で、'in the morning' (「朝に」) の意味であったが、これが「翌朝」となり、「翌日」となった。

9) Scrooge said that he would see him — yes, indeed he did. He went the whole length of the expression, and said that he would see him in that extremity first. (p. 7)

下線部は、'he would see him dashed yes, ...' と発音すれば良いが、本来の意味は、'he would see him damned...' で、'dashed' は 'damned' の婉曲語となっている。'd-d' とか 'd-' と略して

書く習わしである。そして ‘went < go’ については、言動などが程度・徹底さなどにおいて、「～にまで及ぶ」の意味であり、結局のところ、この箇所は、‘said < say’ 「～とまで言う」となる。

10) ‘Good afternoon,’ said Scrooge. (p.7)

「さようなら! (=とっとと帰れ!)」の意味ゆえ、尻上がり調の発音となる。

11) ... ‘my clerk, with fifteen shillings a week, and a wife and family, talking about a merry Christmas.’ (p.8)

1971年に、1ポンド (pound) が100ペンス (pence) に決まり、基本的にはシリング (shilling) は使われなくなったが、1971年より前は、1ポンド=20シリング=240ペンス (1シリング=12ペンス) で、1ギニー (guinea) =21シリング (今の1.05ポンド) であった。しかし現在でも、1シリング銀貨は5ペンスに、2シリング銀貨は10ペンスに相当し、使用されている。

12) It certainly was; for they had been two kindred spirits. (p.8)

‘kindred spirits’ は、「気の合った者同士」の意味である。

13) ‘And the Union workhouses?’ demanded Scrooge. ‘Are they still in operation?’ (p.9)

この下線部の意味は、「連合救貧院」で、救貧区連合の共同経営によって運営されている救貧院を指している。「救貧院」(workhouse = poorhouse) は、教区を単位にして各地方自治体に依存していた1601年の「救貧法」(The Poor Law) に基づいて設置されたのが始まりだが、1843年発行のディケンズの『クリスマス・キャロル』の場合は、1834年の「新救貧法」がベースとなっている。この「新救貧法」は、国家の統制による画一的な救貧政策の実施を目指したもので、救貧の単位として複数教区をまとめた教区連合を設け、そこに選挙による救貧委員会を設置した。救貧を最小限度にとどめるために、労働能力をもつ者には救貧院で共同作業の労働を課した。‘The Poor Law’ に関しては、次の14) に出てくる。

14) ‘The Treadmill and the Poor Law are in full vigour, then?’ said Scrooge. (p.9)

‘the Treadmill’ は、「踏み車の刑」の意味で、刑務所に入れられた囚人を懲らしめるために踏み車を踏ませる刑だが、ただ意味も無く踏ませるだけという側面もあった。‘vigour’ は、イギリス

式のスペリングである。

- 15) 'Many can't go there; and many would rather die.' 'If they would rather die,' said Scrooge, 'they had better do it, and decrease the surplus population. Besides—excuse me—I don't know that.' (p. 10)

この箇所については、拙書（『ディケンズと「クリスマス・ブックス」』関西大学出版部、2000）において詳しく分析して説明している。スクルージは、寄付行為という大義名分のもと、何の疑問をも挟まず、自信満々で堂々とした態度の紳士の中に、或る種の嫌悪感、つまり、相手の紳士の内に潜む似非ヒューマニズムを直観的に感じてしまったのではないかという筆者なりの解釈である。これは、スクルージの人間と社会に対する鋭い観察眼、換言すれば、人間をしかと見据えるリアリズムの眼である。筆者の意見を受講生に押し付けるのではなく、拙書のその箇所のコピーを学生に配布し、改めてじっくりとこの英文を吟味・味読する。'a sense of reality'を有するスクルージ像の分析から、さらにゼミ生には、このようなキャラクターを創出した作者ディケンズの鋭敏な眼差しにも目を向けさせる。ところでここで忘れてならないのは、英国の経済学者マルサス（Thomas Robert Malthus, 1766-1834）の人口論（『人口の原理』1789）にも触れることである。人口の増加は必然的に生産の増加を上回るので、社会的幸福はほど遠くなるという論理である。これがスクルージの発話の下敷きになっていることをも学生には伝える。

- 16) In the main street, at the corner of the court, some labourers were repairing the gas-pipes, (p. 10)

'labourers' はイギリス式のスペリングである。'the gas-pipes'（ガス管）は、18世紀の終わり頃、イギリスでは石炭からガスを作ることが発明され、19世紀の初めには、ロンドンで世界初のガス事業が開始された。ガスを送るために鉛の管を地下に埋めた。当時、ガスは灯りとして用いられた。

- 17) The water-plug being left in solitude, its overflowings sullenly congealed, and turned to misanthropic ice. (pp. 10-11)

'the water-plug' は「水道栓」。ロンドンの水道は、17世紀初めに水道会社ができて、家ごとに水を送るシステムが整備された。19世紀になって、水をきれいにする濾過が行なわれるようになった。

18) If the good Saint Dunstan had but nipped the Evil Spirit's nose with a touch of such weather as that, instead of using his familiar weapons, then indeed he would have roared to lusty purpose. (p. 11)

下線部は、英国カンタベリーの大主教・聖ダNSTAN (924-988) のこと。ここは以下のような故事を踏まえている：「ある日の事、聖ダNSTANが聖杯を作っていた時、悪魔が美女の格好に化けてやって来て、聖ダNSTANを誘惑しようとするが、聖ダNSTANは、真っ赤に焼けた鉄の火箸で悪魔の鼻をつまむ。すると悪魔は恐ろしい泣き声を出して逃げる」。このような伝説から、聖ダNSTANは鍛冶屋の守護神となる。

19) 'But I suppose you must have the whole day. Be here all the earlier next morning.' (p. 12)

この 'the' は、指示副詞で、「それだけですす」の意味。'all + the + 比較級' で、「次の朝には、それだけいっそう早く来るんだぞ!」と、和訳すると良い。

20) Scrooge had as little of what is called fancy about him as any man in the city of London, even including — which is a bold word — the corporation, aldermen, and livery. (p. 13)

「スクルージは、as 以下の人と同じほど、いわゆる空想力の持ち主ではほとんどなかった」の意味となる。'the city of London' は、いわゆる「シティー」で、英国の金融・商業の中心地である。'corporation' は「市自治体の役人」、'aldermen' は「市参事会員」、'livery' は「市の同業組合員」である。

21) Half-a-dozen gas-lamps out of the street wouldn't have lighted the entry too well, so you may suppose that it was pretty dark with Scrooge's dip. (p. 15)

下線部は「ガス灯」で、道を照らすガス灯は、1812年頃に設置され、夕方と朝に、点灯夫と呼ばれる人が点灯と消灯を担当した。

22) Up Scrooge went, not caring a button for that. (p. 15)

'not ~ a button' は、「ちっとも～ではない」の意味である。

23) 'Who are you?' 'Ask me who I *was*.' 'Who *were* you then?' said Scrooge, raising his voice.

'You're particular, for a shade.' He was going to say 'to a shade,' but substituted this, as more appropriate. (p. 18)

'for a shade' は「幽霊にしては」の意味で、'to a shade' は「些細なことまで」（=even to the minutest shades of expression）の意味である。「君はほんのちょっとしたことにまで気難しいね」（You're particular to a shade.）と言うつもりだったのが、「君は幽霊にしては気難しいね」（You're particular for a shade.）と取えて言った、というくだりである。作者ディケンズの言葉遊びを読者は楽しみたいと思う。現にディケンズは、この箇所に関して、本文改訂（the revision of a text）を行なっている。本稿の私たち使用のテキストは、「You're particular, for a shade.」で、これは定本の *Oxford Illustrated Dickens* のテキストと同じであるが、ディケンズの生原稿と 1843 年 12 月 19 日発行の本では共に「You're particular — for a shade.」となっている。

24) '...There's more of gravy than of grave about you, whatever you are!' (p. 20)

この箇所から作者ディケンズの言葉遊び・ダジャレが感じ取れる。「君はたとえ何であるにせよ、君は、墓場よりも肉汁の方にうんと縁がありそうだ」の意味である。

25) 'You see this toothpick?' said Scrooge, returning quickly to the charge, for the reason just assigned; (p. 21)

この下線部の英語表現に関して、作者ディケンズは、本文校訂を行なっている。本稿使用のテキストと 1843 年 12 月 19 日発行の本と定本である *Oxford Illustrated Dickens* のテキストは同一であるが（「You see this toothpick?」）、ディケンズの生原稿は「You see this toothpick —,」となっている。ここでゼミ生には、本文校訂のさらにわかりやすい具体例として、ディケンズの晩年の作品『大いなる遺産』（*Great Expectations*, 1861）を取り上げる（Cf. 拙書『実践知性としての英文学研究』関西大学出版部、2014）。その際、本文の改定に神経を使う「作家の業」とは何かを考える。自死を決意した川端康成が死の直前に書き残した『雪国抄』（1972）についても授業で言及する。

26) 'You must have been very slow about it, Jacob,' Scrooge observed, in a business-like manner, though with humility and deference. 'Slow!' the Ghost repeated. 'Seven years dead,' mused Scrooge. 'And travelling all the time!' 'The whole time,' said the Ghost. 'No rest, no peace. Incessant torture of remorse.' 'You travel fast?' said Scrooge. 'On the wings of the wind,' replied the Ghost. (p. 23)

なぜスクルージは、マーリーに向かって、その旅は非常にゆっくりだったにちがいない、と言ったのか。それは、英文にもあるように、マーリーが死んでから7年も経つのに、今頃になってここにやって来るとはどういうことかという思いがあって、スクルージは‘slow’と言ったのである。ところが、マーリーにとっては、スクルージの‘slow’という発言が心外だったので、感嘆符(!)のついた‘Slow!’(「ゆっくりだって!とんでもない」)と発したのである。すると今度はスクルージが、‘You travel fast?’(「じゃ、君は速く旅をしているのか?」)と尋ねる。これに対してマーリーは、‘On the wings of the wind’(「そうだ速くだ」)と、‘alliteration’(頭韻)を踏んで答える。この両者の巧みな言葉のやりとりを味読する。

2 架橋：作品『クリスマス・キャロル』と「実践知性としての英文学研究」

(1) 筆者がこの世で一番信頼している日本のディケンズ学者は、小池滋である(蛇足ながら、外国の研究者としては、筆者はH. M. ダレスキー(Cf. Daleski, H. M., *Dickens and the Art of Analogy* (Faber & Faber, 1970)の学説を敬愛してやまない)。このことに関しては、これまでも頻繁に拙書で触れてきたので、ここでは省略するが、ディケンズの『クリスマス・キャロル』の語り口は落語のようだと看破した小池滋は、自ら落語調の翻訳書(小池滋(訳)『クリスマス・キャロル』新書館、1985)を刊行している。社会への批判や社会改革を笑いと涙に包んでユーモラスに表現したディケンズ文学の真髄に迫る小池滋の深甚なまなざしに筆者は深く思いを致す次第である。さらにゼミ生には、2015年4月6日付けの読売新聞のネット配信記事(英文学者・小池滋へのインタビュー記事で、タイトルは「ディケンズと日本人」)のコピーを配布し、ディケンズの文学とその歴史的背景の想到資料とする。その際、同時に、小池滋の翻訳本『オリヴァー・トゥイスト』(講談社文庫、1971)所収の小池滋による詳細な「解説」を教室で精読し、改めてディケンズ文学の全体像の把握に努める。さらに、ディケンズのユーモアに関しては、Priestley, J. B., *English Humour* (Heinemann, 1976)を用いて、学生に教授する(邦訳は、小池滋/君島邦守共訳『英国のユーモア』秀文インターナショナル、1978)。

(2) 作品『クリスマス・キャロル』は、往々にして児童文学のジャンルに入れられるが、実は子どもにとっては非常に恐ろしい物語だと説く佐藤亜紀のエッセイ(「解説 ディケンズはおいしい」村岡花子訳『クリスマス・キャロル』河出書房新社、1994、所収)を紹介する。主人公スクルージが自分の死後の葬儀を見る場面などは一般の子ども向きの物語ではない、と佐藤亜紀は言う。「子供が感じやすいというのは嘘だ。…感じやすさは、十分に面の皮が厚くなり、何を感じても大丈夫という歳になってからの贅沢品である」(同書、pp. 186-187)、と佐藤亜紀は述べる。ロシアの哲学者・批評家のミハイル・バフチン(1895-1975)の影響を受けている作家・佐藤亜紀の所見は、傾聴に値するものである。

（３）児童文学という観点から、ディケンズと同時代人のデンマークの作家ハンス・クリスチャン・アンデルセン（1805-1875）との関連を射程に入れたレポートを書きたいと言うゼミ生がけっこういるゆえ、その際は、エリアス・ブレスドルフ『アンデルセンとディケンズ』（渡辺省三訳、研究社、1992）とマイケル・ブース『ありのままのアンデルセン』（寺西のぶ子訳、晶文社、2017）の著書を教室で紹介する。

（４）『クリスマス・キャロル』のテーマは、‘Conversion’である。これに関しては、拙書『ディケンズと「クリスマス・ブックス」』（関西大学出版部、2000年）に詳しく記述しているので、授業ではこれを基にしてディケンズの宗教観ならびに英国の宗教史を考察する。筆者は、‘Conversion’に関して、さらに話を展開させるために、たとえば新美南吉、夏目漱石、そして志賀直哉等の作品に言及し、キリスト教的教義の影響が大きい西洋の場合と日本のそれとの違いに注目する。また、「改心」をする主人公スクルージ像に関する重要な論文（Wilson, Edmund, “Dickens: The Two Scrooges”, *The Wound and the Bow*, 1941. 邦訳は、中村絃一／佐々木徹／若島正共訳『エドモンド・ウィルソン批評集 2 文学』みすず書房、2005）について、筆者は、学生にわかりやすく説明する。スクルージ像の二面性、すなわち「凶悪さ」と「慈悲深さ」という表と裏の二つの顔に関して、子ども時代に社会から残酷な仕打ちを受けた体験を持つ作者ディケンズの生い立ちから解明していく犀利な論考である点を、授業では強調する。

（５）作品から読み取れる数々のメッセージをゼミ生と共に話し合う。たとえば、登場人物ボブ・クラチット（Bob Cratchit）の末っ子のティム（Tim Cratchit）は、スクルージという冷酷無比な守銭奴を救う役割を果たす人物である点に目を向ける。ティムこそ、他者をケアする能力を有した傑出した人物であることに思いを馳せてみる。そしてさらに、スクルージの行動軌跡から、人間の未来は、過去の積み重ねであるとも考えることも可能となる。これは案外、作者ディケンズ自身のメッセージかもしれない。また、12歳の少年チャールズ・ディケンズの靴墨工場での屈辱的な労働体験（Cf. 西條隆雄他（編）『ディケンズ鑑賞大辞典』付録CD、南雲堂、2007）は、その後のディケンズの作家人生の発展のきっかけ・ばねになったかもしれないという議論から、悪条件がレジリエンス（復元力）を育むということもありうるのではないかと、推論してみる。こうした読者の自由自在な文学的解釈は、フランスの哲学者・批評家ロラン・バルト（1915-1980）の「読者の誕生と作者の死」というテキスト理論（Cf. 石川美子『ロラン・バルト』中央公論新社、2015）を踏まえている。

（６）筆者の手元には1996年8月4日付けの朝日新聞・国際版（筆者が英国滞在中に入手したもの）があるが、そこには作家・水村美苗が作家・辻邦生に宛てた書簡という形式で、水村美苗の「ディケンズを読む快樂」と題するエッセイが掲載されている（後に、水村美苗／辻邦生

『手紙、葉を添えて』朝日新聞社、1998.として出版される)。そこで水村美苗は、「ディケンズが自作の朗読の名手であり満場の聴衆を魅了するのを好んだ」と述べている。授業では、水村のこのエッセイからディケンズの公開朗読 (public readings) の話へと移行する。ディケンズが初めて自作の公開朗読を実施したのは1853年末だが、そのとき既に『クリスマス・キャロル』を演目として取り上げている。通常ディケンズは、自作を公開朗読用にアレンジする際、オリジナルの長編を縮めるのだが、この『クリスマス・キャロル』に関しては、もちろん短縮したものもあるが、基本的には原作とほとんど同じままである。原作の文字言語がそっくりそのまま朗読用の音声言語としても通用すると、作者は確信したにちがいない。それゆえに、テキストの音読を学生には勧めている。その際、Collins, Philip (ed.), *Charles Dickens: The Public Readings* (Oxford Univ. Press, 1975) をゼミ生には紹介する。ところで、水村美苗に関しては、彼女は常に、話し言葉とは違う「書き言葉」、すなわち「精神世界の探求をになう専門の言語たる文学言語」を意識していることを付け加えておきたい (Cf. 土田知則／青柳悦子『文学理論のプラクティス—物語・アイデンティティ・越境』新曜社、2001、p.248)。また、乙川優三郎の小説『ロゴスの市』(徳間書店、2015)のテーマは、通訳者と翻訳者の生き方の差異だが、取って言い換えれば、「話し言葉」と「書き言葉」の違いと言ってもいいだろう。これについても学生と議論する。

(7) ロシア語会議通訳者ならびに作家として多方面で活躍した米原万里 (1950-2006) の「文学こそがその民族の精神の軌跡、精神の歩みを記したもので、その精神のエキスである」(米原万里『米原万里の「愛の法則」』集英社、2007、pp.179-180) という言説をゼミ生に紹介する。なぜならば、本学部の学生は、米原万里のロシア語会議通訳者という職業にまず魅力を感じ、そこから彼女に親近感を持ち、その彼女の語る文学観に自ずと耳を傾けてくれるからである。

(8) 政治学者・中西輝政の言説「西欧の明示された学問や「社会科学」というものを明治以来、熱心に取り入れ、また、英文学への強い関心を抱きつづけてきた近代日本の知識人が、この「イギリスの知恵」には一貫して冷淡あるいは無関心でありつづけてきたのは驚くべきこと、といえるかもしれない」(中西輝政『国まさに滅びんとす』集英社、1998、p.253) は、筆者自身にとっての自戒の念となる。中西のこの言説は、評論家・柄谷行人の「英文学畑では三人の批評家 (福田恆存・江藤淳・吉田健一) は別として、ほとんどの英文学者に接するとすぐに愛想が尽きた」という告白に通じるものがあるだろう (Cf. 柄谷行人『反文学論』冬樹社、1979)。現に、英文学者・宮崎芳三は、「日本の英文学研究は本来に脆弱なものであり、そこに見られるのは勤勉だけで、自分自身を見失った国籍喪失の傾向が顕著だ」と述べている (Cf. 宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』研究社、1999)。これらの言説を傾聴するに如くはない。

(9) ゼミ生のほとんどは卒業後、一般企業に就職する。そこで筆者は、ゼミ生に向かって、ノーベル文学賞の受賞者でもあるイギリスの20世紀を代表する詩人T. S. エリオット (1888-1965) とポルトガルの20世紀を代表する国民的詩人フェルナンド・ペソア (1888-1935) に関する挿話を披露する。前者のT. S. エリオットは、実際に金融業に携わっていたという経験があり、それゆえに近代主義について机上の空論ではなく、多面的に知り尽くしていたのである。そして後者のフェルナンド・ペソアは、生涯、会社勤めをしながら創作活動をした人である。「現実と虚構」あるいは「現実と芸術」と言い換えても良いが、いかなる仕事に就こうとも、人が生きていく上で、これら二つは車の両輪の如く必要欠くべからざるものであろうことを認識する。そして学生に、ディケンズと同時代人のベンジャミン・ディズレーリ (Benjamin Disraeli, 1804-1881) のことを話す。ディズレーリは、英国ヴィクトリア朝時代の小説家でもあり、政治家でもあった。彼は保守党の党首で、2期にわたって首相を務めた。彼はヴィクトリア女王の寵愛を受け、1876年にはヴィクトリア女王からビーコンズフィールド伯爵位を受けている (Cf. 村上リコ『ヴィクトリア女王の生涯』河出書房新社、2018)。彼こそまさに文武両道を体現した人である。文学に精通しているゆえ、普段から豊饒な語彙を駆使できる正に言葉の達人で、秀逸な言語コミュニケーション能力が彼の生きる術のひとつだったことは紛れもない事実だろう。この挿話を実社会に進むゼミ生に少なくとも一度は語ることにしている。さらに筆者は、江藤淳の『作家は行動する—文体について—』(講談社、1959)をもゼミ生に紹介する。文学研究の場合、必ずしも人間の「内面」に深く踏み込むだけでなく、「外面世界」にももっと目を向けても良いのではないかと、ということを経験生には訴えている (Cf. 宇佐見太市「ブロンテ姉妹はわれらが救世主たりうるか」宇佐見太市他 (編)『外国語研究—言語・文化・教育の諸相』ユニウス、2002、所収)。現代詩作家の荒川洋治の「文学は実学だ」という主張も学生には紹介する (Cf. 荒川洋治『文学の空気のあるところ』中央公論新社、2015)。

付記

筆者は、『外国語学部紀要』発刊 (『外国語学部紀要』関西大学外国語学部編集・発行、創刊号、2009) に際して、初代・外国語学部長として巻頭言執筆を依頼されたが、拙文の最後から二つ目のパラグラフに、「己の姿を映し出す己自身の言葉で真剣に綴られた研究成果には時空を超えた普遍性が存在すると信じつつ、記念すべき創刊号を皆様方にお届けする」と揚言した。これは昔からの筆者の一貫した定見である。今回、本稿執筆において、事々しいことは筆者の意に染まぬことゆえ、身構えたイメージの「筆者」ではなく、軽やかな感じを醸し出す「わたくし」という称呼を用いたかったが、アカデミズムの慣例にならって敢えて「筆者」で通した。実は、このことに関しては、恒吉僚子「研究における「わたくし」の領域と異文化の研究」(秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロジー』東京大学出版会、2005、所収)の所見と筆者のそれとが一致していることを吐露しておきたい。

また筆者は、現代詩作家の荒川洋治 (2019年12月15日付けで日本芸術院会員となる) の文章表現に対する感性にいくぶん親近感を抱いている。荒川洋治は、学術論文の巻末の「注」に関して、かなりネガティブな立場を貫いている (Cf. 荒川洋治「言葉と世界」『諸君!』文藝春秋、2007年2月号所収)。これまでアカデミズムの世界で四十数年の長きにわたって生きてきた筆者自身は、荒川洋治のそのような言説に全面的には賛同できないが (現に筆者はこれまで学術論文を執筆する際は当然ながら巻末に精緻な「注」や「引用参考文献」をつけることを実行してきた)、ただ、あくまでも文筆活動に携る一個人としては、彼の言わんとする胸中は察することができる。よって今回のような授業実践報告においては、「注」を巻末につけないことにした。そのことにより、エッセイ・クリティシズム的な芳香を醸し出せれば、と勝手ながら思った次第である (エッセイ・クリティシズム的なアプローチに関して、若き日の筆者が最も影響を受けた書物は、小池滋『ディケンズ—19世紀信号手』冬樹社、1979.である)。

ところで、本学部創設時に「卒業ゼミナール」に関するカリキュラム策定を学部長予定者として筆者が模索していたとき、筆者の脳裏をかすめたのは、「紅テント」で馴染み深い劇作家・演出家・小説家・俳優の唐十郎が1997年10月1日から2005年3月31日までの7年半、横浜国立大学教育人間科学部教授を務め、その間、魅力あふれる「唐ゼミ」を担当したことである。これまでいかなる権力にも与しない立場の人だと評され、「アングラの旗手」とも呼ばれた、日本の演劇界に燦然たる足跡を刻んだあの唐十郎が、国家公務員として国立大学に勤務し、そこでゼミを持ったのである。この「唐ゼミ」の担当教員・唐十郎とゼミ生との関係について、唐十郎を横浜国立大学に招聘した室井尚は、「まさしく、吸血鬼のようにお互いの血をすすり合うような不思議な関係が生まれたのである。もしそうであるとすれば、この関係は彼らが卒業しても、大学の外に出ても変わることはないだろう。唐十郎の血を吸い続けることで、その共犯関係の中で強度に満ちた作品を作り上げることの快楽が尽きない限り、彼らの活動はこのまま続いていこう」(唐十郎／室井尚『教室を路地に!』岩波書店、2005、p.149)、と述べている。これは、凡人の筆者にはとうてい真似などできない、凄まじいまでの熱き師弟関係である。ゼミ担当者としての筆者は、何度か密かに「唐ゼミ」に憧憬の念を抱いたものの、唐十郎とは違って、筆者の力量不足ゆえに筆者担当のゼミは、今に至るまで、理想通りには進んでいないと思う。常に、内心じくじたるものがある。心もとないことばかりである。夜遅く、ひたすら呻吟する筆者である。

ただ、作家・中上健次の言葉を拝借して、筆者はゼミ学生に、「文学をやれ!」と、励ましてはいる。実はこのメッセージは、これまでの経験上、けっこう学生の琴線に触れるようである。この「文学をやれ!」という言説に関しては、以下の如く作家・村上龍が簡潔に解説している: 「中上健次は酔うと必ずわたしにそういうことを言った。文学を書け、とは言わなかった。やれ、と言ったのだ。中上健次にとって、小説を書くという作業は肉体的なものだった。やる、つまり英語で言うと、doで、writeやdescribeやcomposeではない。頭脳で整理して書き写す

のではなく、肉体を使って「行う」ものなのだった」（村上龍「『文学的』な近況について」『中央公論』2000年11月号、p.285）。

さらに本稿において補記すべきことは、筆者は、大村はま／荻谷剛彦・夏子『教えることの復権』（ちくま新書、2003）に empathy を抱いているということである。これまでの「詰め込み教育」への反動であろうか、日本の教育界においては自主性を重んじるがゆえに、「教える」ということがいくぶん軽視されているように感じている筆者は、もちろん時代に逆行する意図は毛頭ないが、ただ、研鑽の賜物としての知性を磨くための基盤である無限の深奥を湛えた豊かな「知識」をゼミ生にはたっぷりと注ぎたいと思っている。それゆえに、少々高度かなと思える教材も積極的に提示し、「教えて」いる。

これまでのキャンノン（正典）と言われる「アングロサクソン系の国家文学とか国民文学」という概念からいったん脱して、「英語で書かれた英語圏の文学」にも光を当てていこうという新しい流れが今、生じている。これは、ポストコロニアル文学の思潮に沿って生まれてきた考え方である。この概念を認知することによって、私たちの思考力や判断力は、より一層、多角的・多面的・重層的なもの（＝パララックス＝parallax）に成り得るだろう。筆者は、いたずらに古い伝統を墨守するのではなく、このような新しい思潮をしかと踏まえた上で、なおかつ、広い間口と奥行きを有した「古典」に挑み続けたいと願っている。

最後に、常に剛胆と同時に繊細な心配りをも見せる、優れて「知の人」である作家・見城徹の読書観が筆者のそれと酷似しているがゆえに、見城徹の言説を取えてここに披瀝することによって、本稿を終えたい。現に筆者は、ゼミ生に幾度となくこのことを説き、ゼミ生も果敢にそれを試みているようである：「…もともとは歌謡集の言葉であっても、自分の内で肉体化し、自分の言葉として獲得することは可能だ。必ずしも頭の中だけからひねり出さなくてもいい。読書を通じて数々の言葉に出会い、そこから人生の指針となる言葉をすくい上げ、肉体化し、実践していけば、言葉を自分のものとして獲得できるのだ」（見城徹『読書という荒野』幻冬舎、2018、p.226）。

引用参考文献

- 荒川洋治「言葉と世界」『諸君！』文藝春秋、2007年2月号
荒川洋治『文学の空気のあるところ』中央公論新社、2015
石川美子『ロラン・バルト』中央公論新社、2015
市河三喜『英文法研究』研究社、1972
宇佐見太市『ディケンズと「クリスマス・ブックス」』関西大学出版部、2000
宇佐見太市他（編）『外国語研究—言語・文化・教育の諸相』ユニウス、2002
宇佐見太市『実践知性としての英文学研究』関西大学出版部、2014
宇佐見太市「現代日本とブロンテ学」*Brontë Newsletter of Japan*、第99号、2019年11月1日発行、日本ブロンテ協会

- 江藤淳『作家は行動する一文体について』講談社、1959
大村はま／苅谷剛彦・夏子『教えることの復権』ちくま新書、2003
乙川優三郎『ロゴスの市』徳間書店、2015
唐十郎／室井尚『教室を路地に!』岩波書店、2005
柄谷行人『反文学論』冬樹社、1979
川端康成『雪国抄』『サンデー毎日』1972年8月13日号、所収
北川梯二(編注) *A Christmas Carol* 北星堂、1973
クロード・レヴィ＝ストロース／中沢新一『サンタクロースの秘密』せりか書房、1995。(クロード・レヴィ＝ストロースの「火あぶりにされたサンタクロース」は中沢新一訳で、「幸福の贈与」は中沢新一著)
見城徹『読書という荒野』幻冬舎、2018
小池滋(訳)『オリヴァー・トゥイスト』講談社文庫、1971
小池滋／君島邦守(共訳)、J. B. プリーストリー(著)『英国のユーモア』秀文インターナショナル、1978
小池滋『ディケンズ—19世紀信号手』冬樹社、1979
小池滋(訳)『クリスマス・キャロル』新書館、1985
小池滋「ディケンズと日本人」(2015年4月6日付けの読売新聞のネット配信記事)
西條隆雄他(編)『ディケンズ鑑賞大辞典』南雲堂、2007
佐藤亜紀「解説 ディケンズはおいしい」(村岡花子(訳)『クリスマス・キャロル』河出書房新社、1994、所収)
高野岩三郎／大内兵衛(共訳)、トマス・ロバート・マルサス(著)『初版 人口の原理』岩波文庫、1962
土田知則／青柳悦子『文学理論のプラクティス—物語・アイデンティティ・越境』新曜社、2001
恒吉僚子「研究における「わたくし」の領域と異文化の研究」(秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロジー』東京大学出版会、2005、所収)
寺西のぶ子(訳)マイケル・ブース(著)『ありのままのアンデルセン』晶文社、2017
中西輝政『国まさに滅びんとす』集英社、1998
中村絃一／佐々木徹／若島正共訳『傷と弓』(『エドモンド・ウィルソン批評集2 文学』みすず書房、2005、所収)
水村美苗／辻邦生『手紙、葉を添えて』朝日新聞社、1998
宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』研究社、1999
村岡花子(訳)『クリスマス・カール』新潮社、1952
村上リコ『ヴィクトリア女王の生涯』河出書房新社、2018
村上龍「『文学的』な近況について」『中央公論』2000年11月号、所収
山本史郎『名作英文学を読み直す』講談社、2011。Cf. 宇佐見太市「書評：山本史郎著『名作英文学を読み直す』」(『年報』ディケンズ・フェロウシップ日本支部第34号、2011。所収)
米原万里『米原万里の「愛の法則」』集英社、2007
渡辺省三(訳) エリアス・プレスドルフ(著)『アンデルセンとディケンズ』研究社、1992
Bowers, Fredson, (ed.) *Vladimir Nabokov: Lectures on Literature* (Harcourt Brace Jovanovich, 1980)
Collins, Philip (ed.), *Charles Dickens: The Public Readings* (Oxford Univ. Press, 1975)
Daleski, H. M., *Dickens and the Art of Analogy* (Faber & Faber, 1970)
Forster, John, *The Life of Charles Dickens* 3 vols. (Chapman & Hall, 1872-74)

ディケンズの『クリスマス・キャロル』を読む (宇佐見)

Page, Norman, *A Dickens Chronology* (Macmillan Press, 1988)

Priestley, J. B., *English Humour* (Heinemann, 1976)

Wilson, Edmund, “Dickens: The Two Scrooges”, *The Wound and the Bow* (Houghton, 1941).

